

# 芸術地理学のケース・スタディとしてのジョヴァンニ・ダ・ウーディネ

大阪芸術大学 教養課程 准教授 小谷 訓子

この研究は16世紀前半のイタリアで活躍した画家/スタッコ制作者/建築家のジョヴァンニ・ダ・ウーディネ(1487-1564)の作品群を取り上げ、盛期ルネサンス後に芸術家たちによって追求された新しい「美」を検証しながら、その動向の様相を明らかにすることを目的としたケース・スタディである。

ジョヴァンニ・ダ・ウーディネは先ず、出身地のウーディネにおいてジョヴァンニ・マルティーニ(Giovanni Martini ca.1470-1535)に師事するが、本格的にキャリアをスタートさせたのは、ローマのラファエロ(1483-1520)の工房に入ってからである。『芸術家列伝』の著者ヴァザーリによれば、『宮廷人』の著者であるバルダッサレ・カステリオーネ(1478-1529)の推薦でラファエロの下に弟子入りし、1516年頃から絵画やスタッコ制作で徐々に頭角を表すようになった。

ローマでは15世紀末頃に古代ローマ皇帝ネロのドムス・アウレア(Domus Aurea)が再発見され、フィリッピーノ・リッピ(1457-1504)や、ミケランジェロ(1475-1564)などの名だたる芸術家たちが、地下(grotta)にあるその古代遺跡を観察していた。勿論ジョヴァンニ・ダ・ウーディネもラファエロと共にそこに出向き、植物や動物などの幻想的な装飾を検証し学んでいた。グロテスクと名付けられたこの装飾は、彼らの芸術制作のインスピレーションの源泉となり、その後ラファエロ工房が制作した作品中に再生産される。ヴァチカン宮殿にあるビッビエーナ枢機卿のロτζア、小さなバスルーム(stufetta)、ローマ郊外のヴィラ・マダマにはドムス・アウレアをモデルにして更にオリジナリティを加えたラファエロ工房の仕事、つまりジョヴァンニ・ダ・ウーディネのグロテスク装飾が施された。しかも彼は、古代ローマの漆喰装飾に改良を加えてスタッコを制作したことで、工房のグロテスク装飾を一手に引き受ける存在となったのである。ジョヴァンニ・ダ・ウーディネが画家や建築家としてよりスタッコ制作者として知られている由縁である。

彼がローマで活躍し始めた頃は、盛期ルネサンスの巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519)もイタリアを去り、次世代の芸術家達が新しい「美」を追求しながら活躍した

マニエリスムの時代であった。この新しい「美」については、バルダッサレ・カステリオーネが唱えた「美」や価値観を主として検証した。加えて、ヴァザーリの『芸術家列伝』に見られる彼の「美」に対する見解や、詩人で理論家のピエトロ・ベンボ(1470-1547)や、同じく詩人で理論家のベネデット・ヴァルキ(ca.1502-1565)らの美学を検証し議論をまとめた。その新しい「美」や価値観、当時の流行などが、ジョヴァンニ・ダ・ウーディネの作品にどのように表されているかを提示しながら、それがマニエリスム芸術としてどのように伝播した、或いは伝播しなかったのかを議論した。

本研究の第一段階では、彼がラファエロの下で学んだ芸術観を明らかにするために、ヴァチカン宮殿のグロテスク装飾を検証しながら議論をすすめた。その際には、ドムス・アウレアの再発見や、1506年のラオコーン像発見などをきっかけに古代遺跡の価値を改めて確認し、古代作品のグロテスク装飾やヘレニズム風様式に新しい美的刺激を感じた当時のローマの芸術界の様相について論じること努めた。

第二段階では、師匠ラファエロの死後、ジュリオ・ロマーノと共にヴィラ・マダマの仕事を引き継ぎ、グロテスク装飾を担当したジョヴァンニ・ダ・ウーディネ自身の作風を明確にしなが、そこに見られる「美」についてバルダッサレ・カステリオーネやヴァザーリが述べている芸術観と照らし合わせながら議論を進めた。

第三段階では、ローマを去ったジョヴァンニ・ダ・ウーディネが、出生地ウーディネやフィレンツェ、ヴェネツィアで関わった作品を検証しながら、そこに表されたラファエロ工房的要素を指摘することで、マニエリスム芸術や新しい「美」がどのような形でそれぞれの地域に伝播したか、或いは伝播の不成功に終わったか、を論じた。伝播の成功/不成功については芸術地理学の考え方をを用いて分析を試みた。